

第3回 まちなみ写真コンテスト

キッズ部門 優秀作品



PM 04:52 〈撮影場所〉塩屋橋 〈撮影時期〉平成23年10月

S.N 福岡市中央区

〈撮影者コメント〉

近くの川に写真を撮るとりに行き帰る時にとった1枚。きれいな青空だけどこか夕方のふいんきがある作品だと思います。

〈講評:藤本 健八〉

万葉の頃、この辺では塩づくりをしていたといわれるその名残の塩屋橋からの1ショット。画面は秋の空気感がいっぱい。ならば作品名を2011・10・PM4:52「塩屋橋」とすると写真の記録性が高まると思う。



福岡タワーの月 〈撮影場所〉福岡タワー下 〈撮影時期〉平成23年10月

ナカカワジ ハルナ
中川路 遥南 福岡市中央区

〈撮影者コメント〉

福岡タワーを見ていたら、ガラスが鏡のようで月を見つけました。この後すぐにライトアップされて、月も良く見えなくなりました。その間にとりました。

〈講評:池田 美奈子〉

鮮やかなピンクの空を背景に、ほんやりと月を反射しながら、内部の構造体をも透かして見るガラスの壁面。その表面をシャープに分割する直線。抽象性に富んだ明快な構図と複雑な光のコントラストが面白い。



真っ赤な夕焼け 〈撮影場所〉自宅のリビングから 〈撮影時期〉平成23年9月

ヨシイ タクミ
吉井 巧 福岡市城南区

〈撮影者コメント〉

真っ赤な夕焼と時期ごとになる風景に感動しました。今のマンションに引っこしてきてまだ3年だけど、引っこしてきてからずっとこの景観を見ていたらほかの人にもこの景観を見てもらいたいなあとこの作品を応募しました。

〈講評:井上 一〉

夕日が沈む風景はいつ見ても美しいものです。ただ、見た時の美しさや感動は写真に撮ると意外に写らない事がありガッカリします。夕日をとらえたこの作品はやや画質が不鮮明ですが、ビルのシルエットを入れる事により太陽の大きさが強調されシンプルできれいな作品となりました。写真上達の第一歩、「感動したら、シャッターを切る」これからもこれを続けて下さい。

福岡市都市景観賞25周年に寄せて

福岡市都市景観賞は今年で25周年を迎えた。今年は、25年間の蓄積を再確認することにした。都市発展のための大きな礎になったもの、福岡沖地震の影響を受けたもの、経済の荒波の中で残念ながら姿が見えなくなったもの、そして福岡市都市景観賞受賞を境目として見事に花開いたものなど、さまざまドoramaがある。

25年間と一口に言うが、長い道のりである。私は唯一、第1回から審査員を続けた。ひとりには歴史の証人としておきたい、という配慮であろう。25年前といえば助教教授になつて間もない頃で、自分で言うのも何だが、新進気鋭の、前途に夢を膨らませていた時代であった。ちょうど福岡市もそれと似た青年期にあった。

海の中道海浜公園ができ、全国で下から「桁だった」人当たりの緑化率が曲がりなりにも改善された。博多湾を介して見る福岡市街は魅力的だった。1989年にはアジア太平洋博覧会が開催され、横浜と肩を並べて地方博最大級の840万人が参加して注目された。1995年にはかつてないビッグイベント「ニバーシアード福岡大会」を成功させ、世界に「FUKUOKA」の名を轟かせた。民間では「イムズ」がオープンし、特急かもめで週末に来る若者をさして「カモメ族」という流行語を生んだ。キャナルシティが完成し、1年間で2000万人という驚異的な来客数を記録した。名実共に個性のある百万都市として成長を続けた。2011年には博多駅が完成し、年間6000万人という博覧会並みの動員数を記録する勢いである。

福岡市の景観対策は、誘導、育成、顕彰を3本柱にしている。誘導面では、市内の多くの大型建造物が景観

アドバイザー制度を経て建てられ、高品質化をめざしてきた。育成面では、業界指導の充実をはかり、ピンクちらし条例やラッピングバス、広告付きバス停など個別の対策も講じてきた。「福岡市都市景観賞」は顕彰面を支える事業である。福岡市がめざす方向を示し、発注者や建築者の努力に注目し讀める。途中から活動も表彰することになり、25年間で189件の対象が表彰された。まざれもなく全国最大の都市景観賞に育った。

2010年には、福岡市都市景観賞に刺激を受けて、景観に関する国際賞である「アジア都市景観賞」が創設され、敬意を表して福岡市で第1回授賞式が開催された。2010年のシーサイドももちの人工海浜の大賞受賞に続いて、2011年は、25年の実績を讀えて「福岡市都市景観賞」に栄誉賞が贈られた。韓国や中国からは何度もテレビ取材があり、特別番組までつくられた。国際的な定評を得てきた福岡市の景観であるが、民産学官が地道な活動続けてきた結果である。

まだまだ課題が多い景観対策であり、さらにこれからは勢いだけで駆け抜ける時代が終わり、知恵を結集して乗り越えなければならない時代になる。最後に、25年間の福岡市都市景観賞を支えてきた、初代委員長吉村卓美氏、2代委員長長中村善一氏をはじめ、多くの審査委員及び関係された皆様には、心より感謝申し上げる。これからも市民の皆様には、参加はもちろんのこと、しっかりと福岡市の景観の発展を監視していたくよう願いたい。

2011年11月

福岡市都市景観賞第3代審査委員長
佐藤 優（九州大学大学院教授）

「福岡市景観計画」を策定中

本市では、魅力ある景観の形成、維持、保全に向けた総合的な取り組みを実施していますが、平成16年に景観法が制定されたことを受け、より実効性を備えた既成・誘導と景観形成への市民・事業者の関わりの二層の推進に取り組むため、現在、景観法に基づく景観計画を策定しています。景観計画（素案）に対する市民意見の募集を本年9月に実施しています。

市内の屋外広告物の調査を行いました！

本市では、これまで、はり紙、はり札など簡易な広告物については、市民ボランティアである違反広告物追放登録員の協力を頂きながら除却を進め成果を上げてきましたが、大型の広告物についてはは掲出実態の把握が困難で、十分な指導ができていませんでした。そこで、平成22年、23年に自動車を利用した新たな調査手法を用いて、市内の主要な道路沿線の屋外広告物の掲出実態を調査いたしました。その結果、本市には相当数の屋外広告物が掲出されていて、そのうち許可を受けているものは約35%程度であることがわかりました。これらの結果を踏まえて、現在策定中の「福岡市景観計画」と連携を図りながら、今後の屋外広告物のあり方について検討を行っています。

